

2017 年第 1 回公開講演会特別講演の報告

黄 文哲 (HU 高等教育研究センター専任研究員)

「現代学生の超多様化現象—調査を手掛りにして— 武内 清」

2017年7月28日に本学HU高等教育研究センター平成29年度第1回公開講演会が開催された。講師として日本の大学生研究の先駆者である上智大学名誉教授・敬愛大学客員教授の武内清先生を迎えて、大変ユニークな視点から現代の大学生像を紹介していただいた。「研究」センターに所属する筆者は、職業柄、武内先生の研究手法に目を引かれた。

ご講演の題目は「現代学生の超多様化現象—調査を手掛かりにして—」。高等教育ユニーク化時代の大学生像の計量的・記述的研究手法による多角的な発表である。

武内先生は、大学生の多様化の背景から入り、大学紛争以来の学生文化の変遷を歴史的な視点でそれぞれの発展段階の特徴を捉え、大学レジャーランド時代の「武蔵野太郎」、バブル期の「上智花子さん」、最後に不況期の「敬愛太郎君と敬愛花子さん」という各時期の大学生の生活スタイルを分かりやすく説明してくださいました。

次に、全国大学生協総合組合の調査を利用し 1980 年代以来大学生の生活重点の変化、大学生活充実度、大学満足度、読書時間の変化を計量的に説明した。「現在」の大学生が「過去」の大学生より不真面目で、勉強嫌いという一般的な世間の「誤解」は解かれた。むしろ、現在の大学生は、国の経済不況、教育政策の改革、家庭事情など様々な要因から影響を受けており、大学が単に勉強のできる環境でなくなるという複雑な不安感やストレスに晒されているのではないかと論じられている。未來の不確定性・予測困難の時代が予想される中で大学教育を頼りに自らの目標を確立するために大学に進学する大学生は今後ますます増えるのであろう。

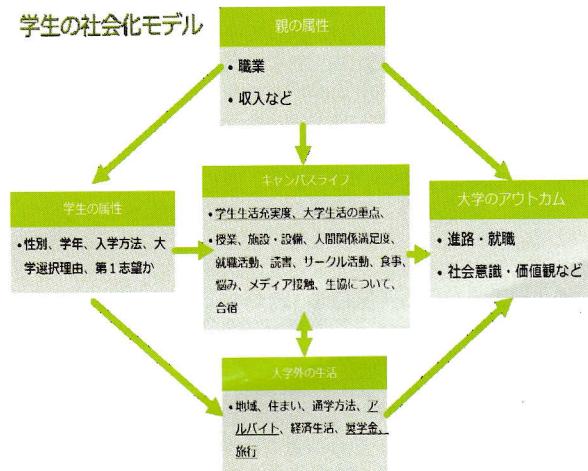
また、多様化している大学生の大学間に横たわる「格差」をより一層明確化させてくださった。武内先生は、「学問へのコミットメント」と「大学へのコミットメント」の2軸を用いて大学生を下記のように4つの類型に分けた。学問へのコミットメントは、学問への追究意識が強く、勉強志向という傾向があり、一方、大学へのコミットメントは大学を生活・勉強の中心場所として見なすという行動パターンである。両軸を組み合わせ大学生の特徴を以下4類型に分類した。



大学が主な活動の場所であって勉強中心は「勉強型」、大学が主な活動の場所でないが勉強中心は「学問型」、大学が主な活動の場所であって部活動中心は「サークル型」、大学が主な活動の場所でなくアルバイト中心は「アルバイト型」。これらの類型

から現代大学生の活動文化を構成していると指摘した。

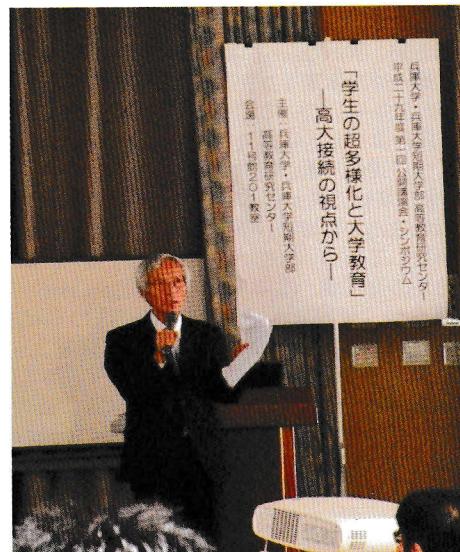
なお、武内先生は、自らの調査データのみならず、他の調査機関のデータもを利用して大学生の超多様化現象を証明した。特に大学間の学力格差・生活文化、進学動機、勉強姿勢などの差異を明らかにした。大学生の複雑な行動・生活スタイルを我々により理解しやすくするために、下記の「学生の社会化モデル」を利用して大学生像をまとめた。



最後の分析視点は、大学教員の立場から現代の大学生の多様化を検証したものである。大学教員 5 名をインタビューし、現代の「大学教員」が大学生の多様性への配慮・心配を常に心がけているという事実を紹介した。学生の教員との関係は小中等教育の段階で影響が大きいとよく言われるが、小中高校と比較すると大学生は教員と共に過ごす時間やお互いのコミュニケーション、インターラクションが比較的少ない。さらに、大学では小中等教育のように「担任教員制度」が少なく、教員とのコミュニケーションを取る機会は当該授業に出る時間や予約制の Office Hours の利用に限られる。

このような限定された機会から教員との関係が大学生の学習行動に及ぼす影響は少ないのではないかという疑問が生まれる。しかし、今回のご講演が我々に示したのは、近年「生徒化している大学生」との人間関係は、大学教員も中等学校教員のようにますます深くになっていることである。

武内先生の多面的視点、多様的研究手法による大学生研究十数年の蓄積は大変インパクトがあり、筆者の脳に新しい刺激を与えた。学術界に多大な貢献をされた先生のご講演を拝聴する機会に恵まれたことに対し感謝の念に堪えない。(文責 黄)



(写真：武内先生講演)

2017年度第1回公開講演会及びシンポジウムの総括

有本 章 (HU 高等教育研究センター長)

標記の会合は、2017年7月28日(金)に兵庫大学において「学生の超多様化と大学教育—高大接続の視点から」を統合テーマとして、学内外から約70名のオーディエンスの出席を得て盛会裏に行われた。河野真学長の挨拶、センター長の挨拶と講師紹介に続き、第一部の講演会が行われた。講師の武内清氏(上智大学名誉教授・敬愛大学客員教授)は「現代の学生の超多様化現象—調査を手掛かりにして」を演題に、学生は対抗文化、大学レジャーランド、バブル期の学生、不況期の学生文化、の各型へと変化を遂げた結果、モラトリアム志向から資格志向へ、学問型から勉強型へ、学生から生徒へとそれぞれ変貌した。とともに、偏差値低下にもかかわらず多様な能力を持った学生が増加したと論じた。

第二部のシンポジウムは上記統合テーマに即して、三人のシンポジストが各論を展開した。葛城浩一氏(香川大学教育基盤センター准教授)は、「ボーダーフリー大学の学生と教育」について、学修面での多様性、教育の質保証、教育の対応等について論じた。そして各種調査を基に偏差値30程度(河合塾)の大学生が学力・資質の両面で小学生の国語力や中学生の算数力にさえ難点を示すなど教育困難が生じている実態を実証的に分析した。

古田薰氏(兵庫大学健康システム学科教授・学習支援センター長)は、「兵庫大学の学生と教育」について、或る学科を事例に三層の学生が存在することを偏差値、プレイスメントテスト、GPAの詳細分析によって明らかにし、一年生から四年生までの成績変動を追跡した結果、諦める学生が増える中で三層格差は拡大するが、かかる学生を対象にした基礎ゼミ、eラーニング、グループワークなど教育の実践の在り方を実証的に明らかにした。

岩田薰氏(兵庫県立東播磨高校長)は、「高校生の求める大学教育」について、偏差値による高校格差が進行している現在、A群、B群、C群など格差に対応した大学進学が行われている現在、かかる高校格差と関係した偏差値が反映される大学教育が少なくないと思われるが、自立した個人の育成の視点からキャリア教育、リベラルアーツ教育、シチズンシップ教育など生徒のコンピテンシーや学力の三要素を伸ばす教育を前提とした高大接続が必要である。そのためには、教員の意識改革が必要だと指摘した。

シンポジウムの司会者のセンター長は、これらの講演やシンポを基に講師、シンポジスト、フロワーの意見を踏まえ概略以下のようない総括を行った。

一つは、大学全入に近い時代を迎えた現在は、地球変化、人口減少、少子高齢化などの社会変化、特に2018年問題や定員割れ(大学閉鎖)との関係を視野に入れた巨視的な議論が必要であり、標題を高校格差、大学格差、社会格差の関係の中に位置付ける議論が欠かせない。

二つには、高校と大学の教育の接続は、日本人の平均寿命が

伸び大学卒以後の人生が長期化する時代を迎えており、これは、単なる偏差値による選抜、配分機能ではなく、生徒や学生の成長発達の観点から、生涯学習を視野に入れて、高校と大学の連続性を考えた教育の質保証が重要性を高めていることを看過できない。

三つは、高校格差と大学格差は対応している現在、1991年以後に設立された第四世代の大学が定員割れや閉鎖の危機に最も見舞われているため、必然的に低階層・低偏差値の学生の教育が損なわれる背景がある。

この時代の大学は計画養成ではなく需要と供給の市場メカニズムに依存して設立されたが、大学とは何かの本質を見失うことになったのではないか。せっかく大学や大学人の自主性や主体性が發揮できる時代が到来したのに、それを発揮できずに、大学の本質を喪失することになったのではないか。現実に生じている問題を直視しないで、エビデンスに基づく真実に目を背けると現実の本質を見究める洞察力は喪失せざるを得ない。いわゆる深海魚の増加はそれと無関係ではないだろう。

市場メカニズムの失敗を踏まえて、専門職大学を含め大学の種別化が構想される時代が到来しつつあり、このままだと大学は専門学校化や学校化へ拍車をかけるかもしれない。かつて起きた高校教育における7・3教育(富山県)の大学教育版が登場する可能性がないとは言えない。

四つは、大学格差と教育の関係は、「ボーダーフリー大学」では超多様化が顕在化し、教育の困難性が一層高まる中にあって、その打開には教職員、特に教員の資質や力量が問われる度合いが高まらざるを得ない。

五つは、学生の現状を十分理解して、実態に即した授業や「教授—学修過程」の展開が不可欠である。人生90年時代の高校教育、大学教育、生涯教育の接続を生涯学習の視点から構想することが欠かせない今日、学習する側よりも教育する側に責任を持つのは、大学のみの問題とは限らないとはいって、特に大学では単なる教育ではなく、研究を担保した「研究・教育・学修の統合」(R-T-Sネクサス)の視点が重要であると考えられる。教員が研究をしないでおいて、学生のみに「学習」ではなく「学修」を要請するのは、あまりに無責任だと言わなくても仕方あるまい。このことに鑑み、教育を無視した研究偏重、研究を無視した教育偏重に傾斜せず、研究を担保した教育によって学習の学修への転換が追究されるべきである。(「教育学術新聞」平成29年8月23日2697号、センターコラム鳥瞰虫瞰(16)などの関連記事を参照のこと)



(写真：登壇者は左から岩田、古田、葛城、有本の4者)